



TITLE:

京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要1

AUTHOR(S):

中村, 徹也; 岡内, 三真; 川又, 正智; 中村, 友博; 泉, 拓良; 宇野, 隆夫

CITATION:

中村, 徹也 ...[et al]. 京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要1. 1974

ISSUE DATE:

1974-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151841>

RIGHT:

京都大学農学部総合館北棟建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査の概要 〔Ⅰ〕

昭和 49 年 10 月

発掘調査担当者

京 都 大 学 文 学 部 助 手	中 村 徹 也
京都大学大学院文学研究科博士課程	岡 内 三 真
京都大学大学院文学研究科博士課程	川 又 正 智
京都大学大学院文学研究科博士課程	中 村 友 博
京都大学大学院文学研究科修士課程	泉 拓 良
京都大学大学院文学研究科修士課程	宇 野 隆 夫

I 調 査 の 経 過

本調査は、京都大学北部構内農学部総合館北棟の増築計画に基づき、同棟建築工事に先立つ事前調査である〔第Ⅰ図〕〔図版Ⅳ－１〕。

北部構内においては、４７年１１月の理学部事務棟建築予定地の発掘調査を端緒とし、４８年から４９年にかけて、農学部総合館南棟周辺および理学部植物園植物生態研究施設増築予定地における発掘調査がおこなわれてきた。その結果北部構内では、『京都大学農学部遺跡』として知られていた縄文時代の遺跡だけではなく、歴史時代各期の遺物包含層が広く存在することが判明してきた。しかもこのたびの発掘予定地は、『京都大学農学部遺跡』の調査地域に最も近い位置にあり、また、工事の掘さく深度が縄文層を掘り貫く予定であることなどから、発掘調査の予定地域全面を二期に分けて調査をおこない、第一次調査で歴史時代、第二次調査で先史時代各層を対象とすることにした。ただし調査面積は建築面積と、その周辺に必要な工事も加えた必要最少限約８００㎡にとどめた。なお、予定地域の西半分に関しては、調査実施後の協議で立合い調査に変更した。これは、既設の旧農学部本館の基礎が深く残っていて、各期包含層がすでに破壊されていると思われること、および多くの高圧電線やその他の埋設管が広く既設されて調査に危険がともなうことなどから、建設工事の初めに大型機械で掘り起こす際立合い、包含層が残存すればトレンチを入れることにしたものである。したがってこの調査完了の節には追って本概要〔Ⅱ〕として、報告の義務を果たすつもりでいる。

４７年北部構内全域にわたる等高線測量とともに設置した北部構内文化財調査用の三カ所の基準点にしたがって、東西約４０ｍ、南北約２０ｍの発掘調査地域には、真北を基線とする方眼グリッドを設定した。この方式によって北部構内のすべての地点の相関関係を正確に記録する計画である。南北２列、東西４列、合わせて８区画の１０ｍ正方グリッドを設定し、東から西へＢ^Ⅰ・Ｃ^Ⅰ・Ｄ^Ⅰ・Ｅ^Ⅰ・Ｆ^Ⅰ、南から北へ１８・１９と呼称し、合わせてグリッド区画名とした（例Ｂ^Ⅰ－１８）〔第Ⅱ図〕。

調査関係の要領は次のとおりである。

調査対象地 京都市左京区北白川追分町 京都大学北部構内農学部総合館北棟

建設予定地

調査主体者 京都大学 総長 岡 本 道 雄

調査指導者	京都大学文学部講師	小 林 行 雄
調査担当者	京都大学文学部助手	中 村 徹 也
	京都大学大学院文学研究科	
	博士課程 3 年	岡 内 三 真
	博士課程 3 年	川 又 正 智
	博士課程 1 年	中 村 友 博
	修士課程 2 年	泉 拓 良
	修士課程 1 年	宇 野 隆 夫
調査協力者	京都大学農学部・工学部・文学部学生・院生	
	京都女子大学考古学研究会有志	
	京都大学施設部	
	京都大学農学部事務室	
調査期間	(第一次) 昭和 4 9 年 2 月 1 2 日～3 月 2 9 日	
	(第二次) 昭和 4 9 年 4 月 2 2 日～7 月 1 0 日	
調査面積	約 8 0 0 m^2	

なお、概報作成にあたって、吉野治雄氏の献身的な協力をえた。

Ⅱ 地形と層位〔第Ⅲ図 図版Ⅴ－2，Ⅵ－1〕

調査地域は、北白川扇状地の南端部で、扇状地末端が西斜して、まさに低湿平地と接する地点である。標高約 6 8 m 。

層位は大別して上下二つの層群にわかれる。層群は概ね整合の水平層である。白川砂層の厚い推積をはさんで上方に歴史時代各層、下方に先史時代各層が見られる。この層序は北部構内の東地区ではほぼ画一的である。上方の層群で顕著なものは、地表下約 1.0 m にみられる平安時代の包含層と、同 1.3 m にみられる奈良時代の包含層である。平安時代の層は、比較的よくしまった暗褐色の砂質土で土器片・瓦片を多く包含する約 5 0 cm の自然堆積層である。奈良時代の層は黒色砂質土で遺物の包含量は比較的少ないが、壺や甕等の土器片の他に、今回の調査では、『和同開珎』の出土をみている。

白川砂層の厚い堆積は、奈良時代以前にこの地域一帯が、当時の「白川」の川底にあたっていたことを物語っている。調査地域内においてこの白川砂層は、B¹ グリッドではみられず、一つ西側のC¹の東端付近から始まっている。そして、西方へ次第に堆積の厚さをまし、D¹グリッドで約1mの厚さになって、それより水平堆積となる。これは、東から西へ傾斜する扇状地末端が、低平地へ移る傾斜変換点の地形に照応している。

白川砂層下の4層の先史時代層群は一番東のB¹グリッドを除いて、すべてのグリッドで歴史時代の各層と白川砂層によって分断されている。しかし、東のB¹グリッドでは連続した層序を示している。ところがここでは、平安時代以降と考えられる南流する別の川によりこの層序が侵蝕され連続した包含層の調査を不可能ならしめている。先史時代の4層はいずれも傾斜面から平地におりと水成層となり、砂質土から粘土質に変貌している。最上層にあたる先史第Ⅰ層は厚さ約5cmの黒褐色土層で、弥生時代前期の土器と共に縄文時代晩期の土器片をも包含している。次の先史第Ⅱ層は厚さ20cm、黄褐色土層である。この層から下方へ、暗褐色土の先史第Ⅲ層、茶褐色土の先史第Ⅳ層の3層はすべて縄文式土器片（前期～後期）および縄文時代の各種石器を包含する層である。層の違いはきわめて明確であり、共に整合の水平層であるので、堆積時期の差異の有無は明らかである。しかし、遺物からみると、上中下各層ともに先後関係を序するほどの対応性がみられず、土器型式の一致する破片が各層に混在しているのが事実である。したがって、扇状台地上から遺跡をおし流して運ばれてきた土砂の二次あるいは三次堆積の層群と考えてよい。先史第Ⅲ層の遺物包含量が、他の二層に比して圧倒的に少ないこともこのことを証している。

これら先史時代層の下方は、凹凸の激しい礫層と砂層との互層がつづき文化層はない。

Ⅲ 遺 構

黒色の奈良時代層に切りこんで平安時代の遺物のはいった不整合のピットや、溝状遺構が検出されている。幅約30～70cm、深さ約3～20cmで、ほぼ東西・南北方向に走っているが、不規則でその性格は不明である。中世以降の整地により遺構の上方は削られている。

白川砂層を切りこんで奈良時代の黒土の落ちこみがみられる。東西方向に長く延びる幅約50cm、深さ15～70cmの溝で、C¹-18グリッドおよびF¹-18グリッドでは北へ曲走す

るようである。甕や壺などを検出することができ、これに流れこむような小さな溝の中より、和同開珎が出土している。D^I-19 グリッドには、一見柱穴様のピット群が多く発見された。掘立柱の建造物が存在した可能性もあるが、残存状態がきわめて悪く建物としてまとまらない〔図版Ⅶ-2〕。

先史時代の各層からは遺構はまったく発見されていない。地形・遺物包含層の堆積状況および遺物の出土状態から推して、遺構を伴う遺跡は、調査地の東北方、京大植物園北端から農学部グラウンド方面にあったと考えてよい。

Ⅳ 出 土 遺 物

整理が完了してないので品目と簡単な説明にとどめる。

(1) 歴 史 時 代 遺 物

〔土 器〕

土師器・須恵器片が比較的多いが、緑釉陶器・磁器片もかなりみられ、他に灰釉陶器・瓦器などが混る。完形のはきわめて少ないが、緑釉の香炉はなかでも稀有なものといえる。

① 平安層出土の土師器片 (多数)

器種は杯・皿・高杯・盤・灯明皿など。農学部総合館周辺の調査の出土遺物に対応し、特に皿・灯明皿に完形品が数点あるが、総じて出土状況に恵まれない。

② 平安層出土の須恵器片 (多数)

器種は、杯・蓋・盤・甕など。完形のものはなく、わずかに杯および盤類に復元完形のものが見える。総じて胎土の色は黒っぽく、焼きは良好である。

③ 平安層出土の緑釉陶器〔図版Ⅶ-2, Ⅷ-1〕

今回の調査で出土した緑釉陶片は、約50片を数える。器形は、碗が大多数を占め、他に皿・水瓶・香炉などがある。これらは、胎土・釉調・焼成温度などから3類に大別できる。

Ⅰ類は、胎土が乳白色または黄褐色を呈し、低火度焼成のために軟かく、土師質である。釉は鮮緑色か濃緑色であるが、釉の剝離したものが多い。この類には、水瓶の口縁部片と碗の底部片がある。

Ⅱ類は、胎土が灰色・乳灰色を呈し、高熱焼成のため、堅緻に焼きしまり須恵質となって

いる。釉は、暗緑色と淡緑色である。底部には、高台のつくものと平底のものがあり、それらのうちに糸切底の明瞭な例が3点みられる。また、高台付底部の2例では、割れ口と外底面とに赤黄色の斑文が認められる。Ⅱ類の器形は、碗と小皿になるものが多い。

Ⅲ類は、胎土が乳灰色または黄白色を呈し、Ⅱ類同様に高温で焼成されたため、堅緻に焼きしまっている。ただ、須恵器のような灰色ではなく明るい色調である。そのためか釉が殆んど淡い黄褐色を呈し、Ⅰ・Ⅱ類のような濃い釉色のものはない。また、釉は胎土に密着したことが多いが、稀には剥離した例もある。この類には、碗と香炉との破片がある。

香炉は2個体分あり、その一方は接合によって完形に復元することができる〔図版Ⅶ-2〕。緑釉陶器の中で全形を知り得る唯一の例なので、やや詳しく述べておく。

口径13.5cm、胴径15.0cm、高台径15.5cm、高さ7.0cmをはかる。口縁部は、印籠蓋のうけ部をなし、うけ部の直下に一条の沈線をめぐらしている。胴部はややふくらみをもち、鈍角の稜をへて高台に続いている。高台は外に反りながら段を作り、ヒ面の端部に終わっている。高台の4カ所にハート形（猪の目）の透しを切り込むが、4個の位置が対称ではない。底部は浅い皿状を呈し、中心ほど器壁が厚い。底部の内外両面に直径1～2mmの目跡があり、外底面には3個、内底面では2個（他の1個は欠失部にあたる）を数える。内底面と胴部内面との所々に黄色の斑文が認められる。淡黄緑色の釉は全面にかかり、内外面とも釉には細かな貫入が多く見出される。

今回の調査で出土した緑釉陶器は、年代の明確な遺物を伴出していない。また、十分に精査をしたにもかかわらず香炉に伴う遺構面は検出し得なかった。しかし、香炉（2個体）や水瓶（1個体）のような特殊な器形が出土しており、付近に建築遺構の存在する可能性が大きい。これら緑釉陶器の年代は、香炉の特徴からみて11世紀前半に比定でき、Ⅰ・Ⅱ類の中のあるものは、それよりも遡る可能性があると考ええる。今回出土した緑釉陶器は、殆んど尾張地方で製作されたと推察されるが、それら詳細については本報告にゆずる。

④輸入磁器〔図版Ⅶ-2〕

今回の調査で出土した磁器片は、約100片を数える。その中では龍泉窯系の磁器が最も多く、次いで中国南方の地方窯製品が多い。器形は、碗・皿・合子・四耳壺などである。

龍泉窯系青磁では、片切彫りの碗片3点、蓮弁文の碗片2点、鎗葉文の碗片2点、内面の区画線の内に渦巻文をもつ碗片1点などがある。さらに、同安窯系の所謂珠光青磁皿片3点、

景德鎮窯系の青白磁合子片1点がある。四耳壺の破片は、胎土・釉調などからみて、龍泉窯系の製品で宋代に属するものではないかと考える。口禿の碗片も数点出土している。また、北九州で多く出土する玉縁口縁をもつ碗片も数点出土している。これらは宋から元にかけて中国南方の窯で製作されたものであろう。時期の遡る越州窯製品または、元・明の染付、あるいは朝鮮の磁器などはまったく見いだされていない。製作年代の比較的にとまとった中国製品のみが出土している事実が目される。平安京跡出土の他の磁器と比較すれば、当遺跡の特色が明らかになるであろう。

⑤瓦 器

ほんの少量で、土鼎片、土鍋片がみられる。復元不可能。中世に下るものである。

⑥奈良時代の垂〔図版Ⅶ－1〕

奈良時代の東西に走る溝の中より出土。奈良時代初期の土師器の垂1個体。復元完形。器高約11cm、口縁径約13cm、薄手の器壁の内外は丁寧なハケ目調整が施されている。農学部総合館周辺調査の際、奈良時代の周溝から発見された甕と同じく土師器のセットをなす。

〔貨 銭〕

①「和同開珎」1枚。銅鑄。B¹-19グリッド東西溝中より出土。黒色土層を奈良時代と判断して良いことを確認できた。『東亜銭志』巻十四によれば、次出とされるもので、文字は非常に端正、鋳上りも精である〔図版Ⅹ-2左〕。

②「寛永通宝」1枚。D¹-19グリッド表土攪乱土中より出土〔図版Ⅹ-2右〕。

〔瓦 〕

各グリッド平安層より破片が多数出土している。軒平瓦・軒丸瓦の文様からみて、平安時代前期から末期にかけてのものが大部分で、一部鎌倉時代に下るものもみられる。軒平瓦3種、軒丸瓦5種。

文様・技法は、栗栖野瓦屋系のものと、播磨系のものが同定できる。

栗栖野瓦屋系の軒丸瓦〔KU7010〕は、平安時代前期のもの。同じものが東南方理学部植物園内調査の際、平安層から出土している。平安宮跡などに同範瓦がある〔図版Ⅹ-1左〕。軒丸瓦〔KU7080〕は平安中期と思われる。内区文様に矢羽根文を放射状にめぐらし全体として菊花文様を思わす。同一文様の瓦は北白川廃寺址から出土している〔図版Ⅹ-1右〕。

平安時代末期の瓦は、六勝寺、鳥羽南殿、平安京各所で発見されているものと同様のもので、唐草文軒平瓦〔KU7850・KU7860〕、連巴文軒平瓦〔KU7800〕、巴文軒丸瓦〔KU7350〕、蓮華文軒丸瓦〔KU7180・KU7190〕などが出土している〔図版Ⅸ-2・Ⅹ-1〕。

(2) 先史時代遺物

先史時代の遺物は、白川層下先史第Ⅰ層の土器群とそれより下方の3層の土器石器群とに大別できる。すなわち、先史第Ⅰ層は、弥生時代前期の土器と、縄文晩期の土器が共伴しており、下方3層からは、縄文前～後期の土器石器が出土していて、この両者に限って混在しない。

先史第Ⅰ層の状況は、かつて、同構内理学部事務棟建築予定地（既報1972年）で調査した層序状況と同じであり、この層位を認めることができる。したがって、先史第Ⅰ層の遺物と下方3層の遺物とにわけて記述する。

〔土 器〕

①弥生前期の土器

すべて破片であり、うち有文4片、無文6片。壺形土器は灰褐色を呈し、外面は丁寧な篋磨調整を施す。このうち一例には頸部に段装飾をもったものがあり、古いタイプに属する。

甕形土器は黒褐色を呈し、口端に刻み目、頸部には沈線をみる通例のものである。ただし、採集の小破片には、刷毛目調整をもったものはない。

これらの資料は極めて断片的なものであるが、包含層の下限を示すうえで重要な意味をもっている〔図版Ⅹ-1〕。

②縄文晩期の土器

すべて破片であり、うち有文8片、無文8片。

口縁部と頸部とに貼付凸帯をめぐらす深鉢形土器である。比較的薄手に仕上げてあり、黄褐色もしくは灰褐色を呈し、焼成はあまりよくない。無文の胴部には下から上にかけての篋削り痕をみる。船橋式とよばれる型式に相当する〔図版Ⅹ-1〕。

③縄文前期～後期の土器

出土した縄文式土器は、前期末から晩期終末期までで、総量は、約50×30×15cmのコンテナ約20杯である。そのほとんどが細片で、かつかなりのローリングを受けており、

完形を想定しうるものはほとんどない。本項では、出土状況が弥生式土器と類似した晩期終末期の土器を除いて記述することにした。

出土した縄文式土器を年代差を基準にⅠ～Ⅶ類に大別したが、整理作業が中途であり、かつ非常に土器が変化に富んでいるので、分類は本概要のための便宜的なものである。またこの分類に属さないと思われる破片もかなりあり、今後の整理作業の完了をまって再検討せざるをえないものとする。

第Ⅰ類〔図版Ⅰ－１，図版Ⅱ－２〕

縄文地の上に突帯を貼付け、爪形をその上に密に施した土器で、口縁内面に段状に肥厚した縄文帯を持つ。口縁上端にも施文されているようであるが磨滅しており原体は不明である。山内清男のいう大歳山式に相当する。

第Ⅱ類〔図版Ⅰ－２，３，図版Ⅱ－２〕

縄文地の上に突帯を貼付け、太く大きな爪形ないし刻目をその上に施した土器。船元Ⅱ式に類似する。３の土器はやや薄手でよりが異っており問題が残る。

第Ⅲ類〔図版Ⅰ－４，図版Ⅱ－２〕

縦に走行する粗い縄文地の上に、半截竹管で弧状の文様を描いた土器。船元Ⅲ式に相当する。

第Ⅳ類〔図版Ⅰ－５～８，図版Ⅱ－２〕

縄文の条が交互に深浅に押捺された縄巻縄文風の縄文を地に施し、その上に半截竹管で弧状の文様を描いた土器。船元Ⅳ式に相当する。

第Ⅴ類〔図版Ⅰ－９～２９，図版Ⅱ－１〕

里木Ⅱ式に併行すると思われる土器を一括し、３種に分類した。

- A種〔図版Ⅰ－９～２３〕 原則として細い棒巻縄文を地に施した土器。頸部は縄文が磨消されて無文帯になっており、口縁が内彎するキャリパー形をなす土器と思われる。細い粘土紐の貼付・半截竹管・棒状工具によって文様が描かれている。文様は、横走向の平行線・弧状の文様・細かい波状の文様が主文となり、所々にこれらの文様を集約する縦走向の弧状の文様・渦巻文が描かれる。この種は全体として里木Ⅱ式に相当するが、瀬戸内海地方・東海地方に対して口縁内面（上端）に縄文を施す例が多い。２３はこの種に一般的な凹底である。

- B種〔図版Ⅰ－24～27〕 太く粗い棒巻縄文を地に施すこと、半截竹管による平行線を密に使用すること、及び突帯文と竹管文が平行して付される点でA種と異なる。平CⅡ式の1部と類似する。平CⅡ式は、本類のA種とB種からなっている。
- C種〔図版Ⅰ－28, 29〕 爪形文を有する種で、器形及び半截竹管の使用法がA種に類似するので便宜的にこの類に入れた。美濃地方の中富Ⅰ式に爪形文を施す例があり、この種と関係があるかもしれない。

第Ⅶ類〔図版Ⅰ－30～36・図版Ⅱ・図版Ⅲ, 図版Ⅳ－1・図版Ⅳ－2〕

中期末後期初頭といわれる土器を一括した。口縁部と胴部が接合するものが少ないので口縁部によって8種に分類し、胴部は個々に記述した。

- A種〔図版Ⅰ－30～36・図版Ⅱ－37〕 「く」字状に内彎する把手状の山形口縁を有する胴のくびれた深鉢形土器。原則として4つの山形になるようである。山形の頂部が平坦な土器（30）と、凸になる土器（35・36・37）がある。縄文を有する土器はすべて口縁上端にも縄文を施す（30・31・32）。先が平坦で断面の丸い工具による押引沈線（32・34）、山形頂部の指頭圧痕（35・37）・外面からの片側穿孔（36）及び沈線を施した所の内面が出るくせ（32・33・34）は、年代的分布の限定が可能であろう。32・33・34は同一個体である。
- B種〔図版Ⅱ－38～47〕 所謂加曾利E式的な流れの中で理解される土器を一括した。胴部は多条の垂下沈線（39・47）、垂下沈線の上端が連結したもの（40）、「ハ」字状ないし三角形に懸垂文が変化したもの（45・46）が描かれているが、すべて縄文は縦方向に施されている。口縁上端に縄文の施されている土器（42・44・46・47）、口縁内面に縄文の施されている土器（39・41・44）がある。先が平坦で断面の丸い工具（42・45）、先も丸い工具（46）による押引沈線、沈線内刺突（44）口縁部文様の集約部の指頭圧痕（40・41）等はA種との関連を示している。
- C種〔図版Ⅱ－48～50〕 口縁部がゆるく内彎し、口縁部と胴部を区画する波状の沈線を施した土器。星田式の退化形と思われる。
- D種〔図版Ⅱ－51・52〕 内彎する口縁部に2本の平行沈線を施し、その間を棒状工具で1列に刺突した土器。口縁上端に縄文を施した土器（51）が多い。
- E種〔図版Ⅱ－53～56〕 磨消縄文の発達した土器で胴がややくびれる深鉢形土器

(53・54・55)と注口土器ないし壺形土器(56)がある。中津式に類似するが口縁部が肥厚しない点で異なる。

○F種〔図版Ⅱ－57～60〕 E種に類似した土器であるが、口縁上端(57・58・60)や内面(58・59・60)に縄文を施すこと、沈線を施した所の内面が出るくせ(57・58・59・60)等でE種と区別される。58・59・60は同一個体の可能性が強い。

○G種〔図版Ⅲ－61〕 口縁部の内外面に横方向に縄文を施し、頸部以下間隔をあけて縦方向に縄文を施した土器。口縁上端の施文は不明である。

○H種〔図版Ⅲ－62～64〕 縄文だけの土器を一括した。口縁部を肥厚させたもの(63・64)は、将来、一種を形成するのであろう。63は、口縁上端、64は、内面に縄文が施されており、また肥厚のさせ方は、B種46と類似する。口縁部を肥厚させない土器にも、口縁上端・内面に縄文を施したものがある。

図版Ⅲ65～77は、第Ⅶ類に所属する胴部である。65は、沈線を施した所の内面が出ており、A種の32等と同一個体の可能性がある。66・67および68・69は、それぞれ同一個体で、71・72と共に、B種の胴部であろう。

70は、沈線を施した所の内面が出ており、B種の沈線には、このくせが見られないので、F種かもしれない。73は、縄文地の上を棒状工具で弧状文を描いており、星田式的であり、C種に、74は、F種に対応する。75は、D種に類似するが、工具を斜めにして刺突する点で、異っている。76は、無節の羽状縄文である。磨滅しており、同一原体によるかどうか不明である。77は、磨消縄文が発達しているが、E種とは文様が異なる。

この類の底部は、ほとんどが平底で、78のような網代底もみられる。

第Ⅶ類〔図版XⅢ－2〕

広義の北白川上層式に相当する土器。目下調査中の京大生態研遺跡において、この時期の土器が、かなりまとまって出土しているので、その整理をまって、分類することにした。

本遺跡から出土した土器は、前期末から晩期までの各期に及び、中期末後期初頭の第Ⅶ類土器が最も多く、第Ⅳ・Ⅴ類が次に多い。その他の類は、混入程度といえる。第Ⅴ類と第Ⅶ類の間には、1956年京大農学部で工事中に採集された、滋賀県滋賀里遺跡K地点におけ

る醍醐Ⅲ式と、星田式に類似した土器がはいると思われる。本調査及び、かつての採集資料の中には、加曾利EⅡ式に類似する土器はみられない。また、京大生態研遺跡は、西関東地方の堀ノ内Ⅰ式が出土しているが、中津式は存在せず、第Ⅵ類は、関東地方の加曾利EⅡ式と、堀ノ内Ⅰ式との間の時期と考えられる。滋賀里K地点の醍醐Ⅲ式土器は、垂下沈線の上端が連結しており、第Ⅵ類の時期は、さらに限定しうるものとする。第Ⅵ類における様々な特徴は、福井県、京都府北部、岐阜県、滋賀県、三重県、奈良県、大阪府と、それぞれ関係を示しており、今後地域色も追求しうるものとする。

〔石 器〕

本遺跡から出土した石器は、切目石錘・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石錐・石匙・不定形削器・石皿・敲石・石棒等である。各石材については、まだ正式な鑑定を行っていない。

①切目石錘〔図版 XIV - 1〕

70点以上出土しており、すべて渡辺誠のいう切目石錘A種である。軟かい小型の円礫の両端を両側から削って切目を作っている。若干欠けている95gが最も重く、8gが最も軽い。40～60gが最も多く、80gクラス、10gクラスも10個前後ある。

②石鏃〔図版 XIV - 2〕

約25点出土しており、凹基式と凸基式がある。凹基式には、基部がふくらむ形のものもある。石材は、サヌカイトとチャートの2種で、チャートは2個である。2cm前後のものと、1cm前後のものがあり、大型の石鏃は作りが丁寧であり、小型の石鏃には片面にしか刃がつけられていないものもある。

③打製石斧〔図版 XVII - 1〕

4点出土しており、すべて10cm～12cmの破片で、復元長は15cmをこえない。バチ形のもものが1片ある。ノッチを片側に持つものは、打製石斧ではない可能性が高い。

④磨製石斧〔図版 XVI - 2〕

5点出土しており、4点は、断面長方形の定角式磨製石斧であり、他の1点は、断面が横に広い六角形を呈する磨製石斧である。前者は、2点が砂岩、2点が変成岩で、復元長12cm、最大幅6cm弱である。後者は、前者と石質が異なり、復元長10cm、最大幅4cmである。

⑤石匙〔図版 XV - 1〕

すべてサヌカイト製で、縦型と横型の石匙が出土している。

⑥ 不定形削器

直刃の削器は、完形で 7cm と 3.3cm 、曲刃の削器も、完形で半径 4cm の $1/4$ 円である。

⑦ 石皿〔図版 XV - 2〕

すべて偏平な石皿である。花崗岩系の石で片面が磨かれているものと、両面が磨かれているものがある。

⑧ 敲石〔図版 XV - 2〕

円形の敲石は、直径 10cm で、両面の中央に凹んだ使用痕がみられる。長方形の敲石は完形のもの $16 \times 8\text{cm}$ 、破片 $10 \times 8\text{cm}$ で、ともに、端から $1/3$ の所に、右上りの凹んだ使用痕がみられる。

⑨ 石棒及び用途不明の磨製石器〔図版 XVI - 1〕

石棒は、緑色をした変成岩で、磨研は良好であり、長径 4.2cm 、短径 3.6cm の橢円形の断面をもつ。用途不明の磨製石器は、灰白色の花崗岩的な石材で、直径約 6cm の断面円形の石器で、若干カーブしている。石材からみて、石棒には不適當であり、太さ及びカーブから、石斧にも不適當と思われる。

本遺跡は、層序をなしていないために、土器と石器との対応関係は不明である。切目石錘・定角式磨製石斧・打製石斧・偏平な石皿のセットは、岐阜県の中期末の石器のセットと類似するので、第Ⅶ類土器に伴うものであろう。不定形の削器は、里木貝塚に類例があり、第Ⅴ類に伴うものかもしれない。

切目石錘は、漁網の垂りといわれているが、本遺跡周辺で漁をする所は、京都盆地中央部寄りの低湖沼か、高野川で行なったものと考え以外にない。しかし、地質学者の意見では、その両者とも可能性が薄いとのことで、今後に検討を要する問題である。打製石斧の出土は、中期末の、東からの影響が、土器のみに限定されなかったことをものがたっている。

(3) 先土器時代遺物

〔石器〕〔図版 XVII - 2〕

ブレ縄文期の石器の存在を示す縦長剝片が2点、 $D^1 - 19 - 11$ 区先史第Ⅱ層及び、 $D^1 - 19 - 22$ 区先史第Ⅲ層より発見された。非常に良質のサヌカイト製で、縄文時代の石鏃、スクレーパーに使っているサヌカイトとは一見して異なる。

内1点は縦剥ぎナイフ型石器と思われ、断面三角形で、石核から剥離した時できるすどい剥離面と原面のなす稜線が刃部となる。

1956年3月本調査地域の北に隣接する東西道路内の工事の際、縄文土器、石器とともに一片のプレ縄文期の石器が出土している。これは今回の調査により出土した遺物整理の作業過程で、以前の近隣出土の資料を参考にすべく一括整理していた時に発見された。この石器は、サヌカイト製の縦剥ぎナイフ型石器で縦に剥いだ剥片の両側に直交する方向から刃をつけ、先端を斜めに剥離して刃部を加工した切り出し型の典型である。

この資料を合わせると、北白川扇状地上にプレ縄文期の人間の足跡を跡づける初めての資料とすることができる。京都盆地周辺では、岩倉幡枝、乙訓大枝についての発見であるが、ナイフ型石器に限っては、両者とも瀬戸内技法が多くみられるのに比して技術的にも異り、京都盆地においても、時期差、もしくは地域間の差異などの新たな問題を提起した。

V 結 語

本調査は建設予定地のうち西半分弱に当る地域の立合い調査が残っており概報の〔I〕として調査半ばで報告するものである。建設予定地域内においては遺構は発見されておらず、地形や遺物包含の密度から見ても、西半分の地域に存在する可能性はほとんどないと考えられる。しかしながら歴史時代遺物をはるかにしのぐ量の先史時代特に縄文時代の遺物は西の地域にもいぜん及んでいる。工事の際の立ち合い調査の重点は当然ここに置かれることになる。

出土した各時代の遺物に関してはなお整理半ばであるため、概略を記すにとどめた。歴史時代においては北部構内各所でこれまでに多く発見されている平安時代の瓦類にまた新たな資料を加えるとともに、その1つが東方に近接する北白川廃寺出土の瓦に同じものを見いだせることは、この地域に眠る建造物の性格が次第に輪郭を明らかにしてきつつあるように思える。土器類は総合館周辺地域の調査の時ほど細かに層位を得ることができず残念であった。

弥生式土器に関しては、北部構内において2カ所目の発見である。縄文時代につぐ弥生時代の人間の足跡が北白川扇状地末端にたどれることを再確認できた。

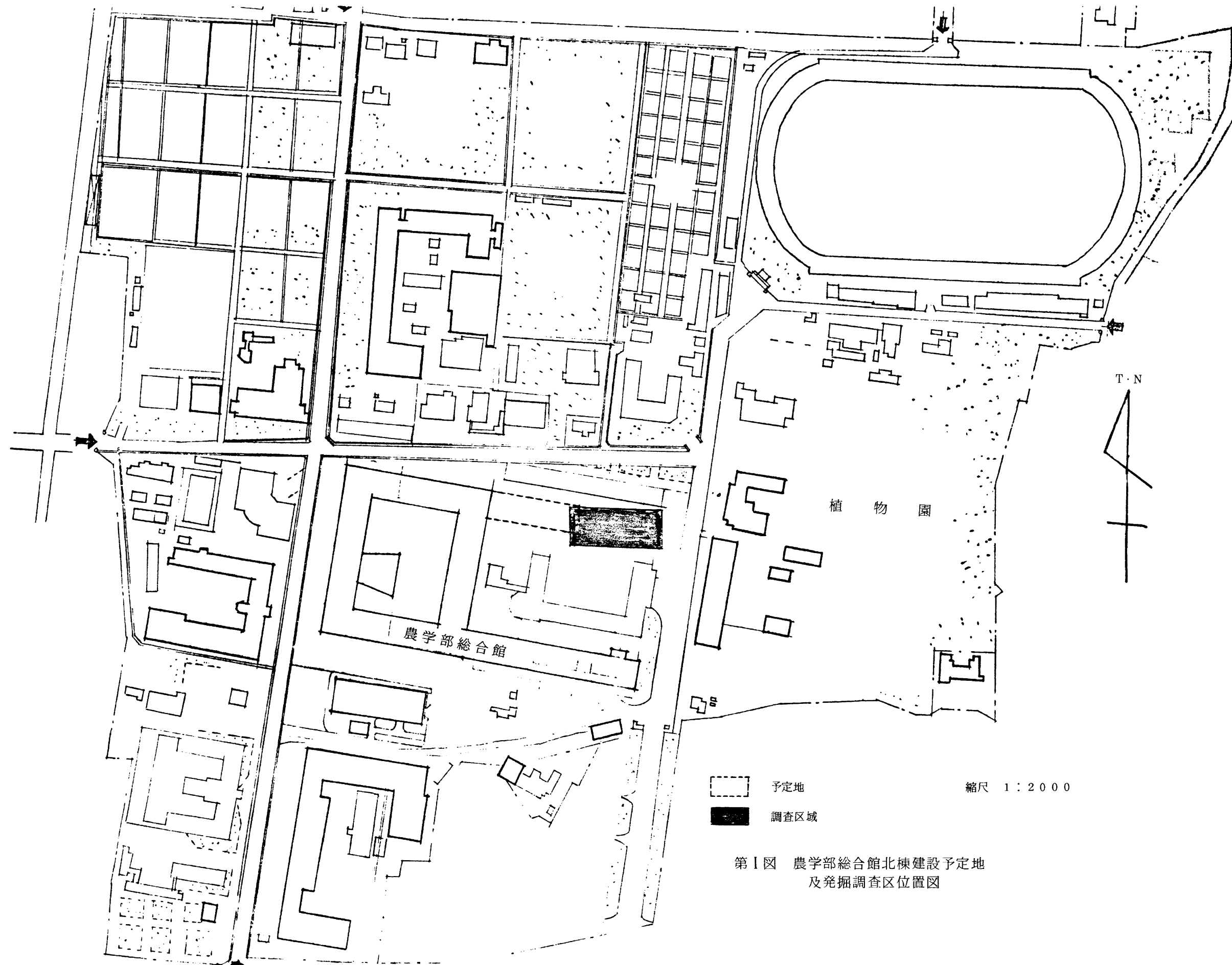
縄文式土器は、多種多様のバリエーションをもつ。縄文前期から晩期にかけて土器編年と土器の動態に関する多くの資料を得ることができた。多量の土器をじっくりと腰を落ちつけて整

理を行なうべく作業を進めている。

プレ縄文期の石器の出土は、京都盆地の人間生活の舞台と時代を拡大した。

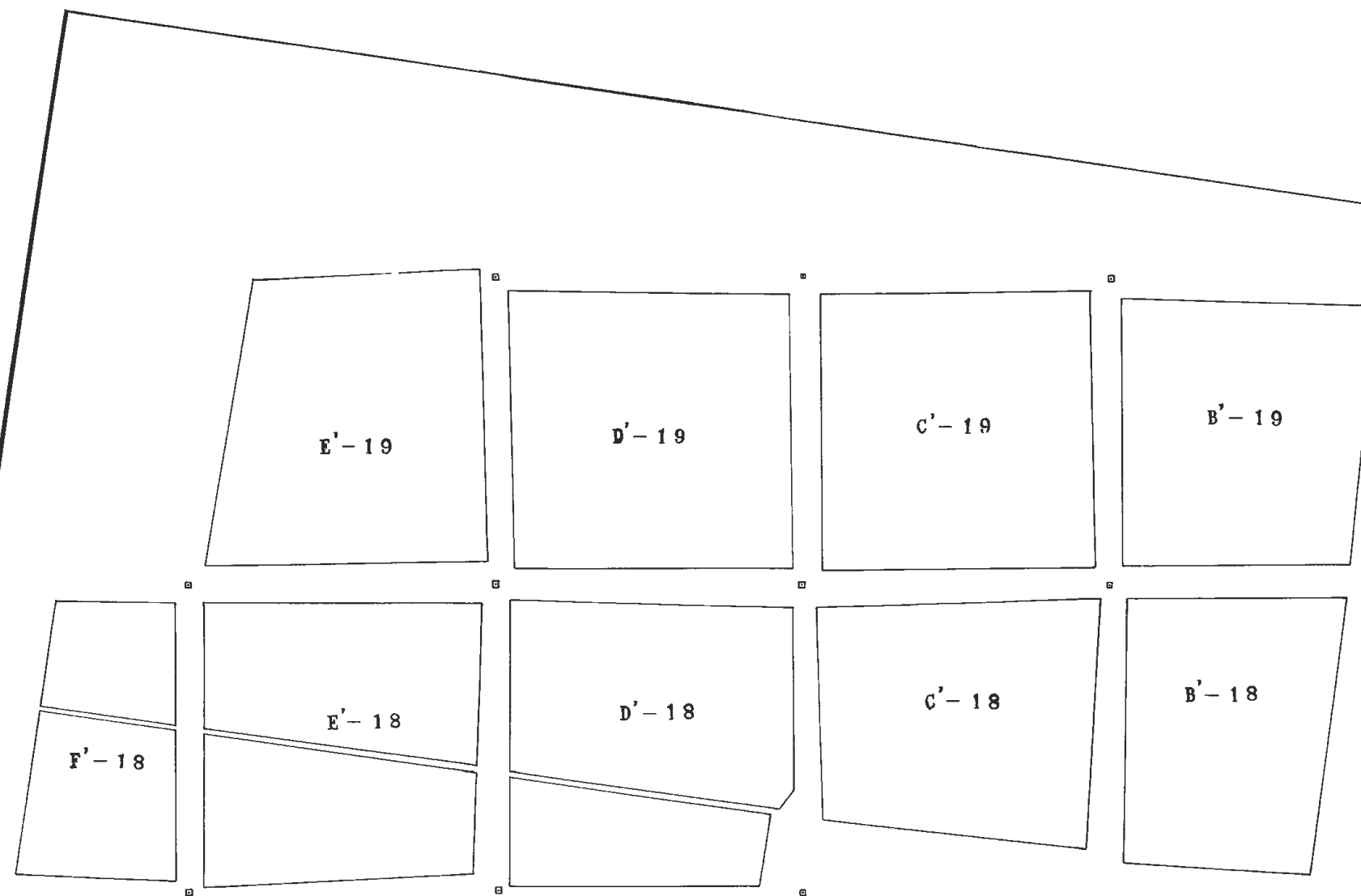
1つの地域での人間の歴史的変遷を追うことができるという北部構内の地域性は、歴史研究にとってきわめて重要なものといえよう。

圖 面 · 圖 版

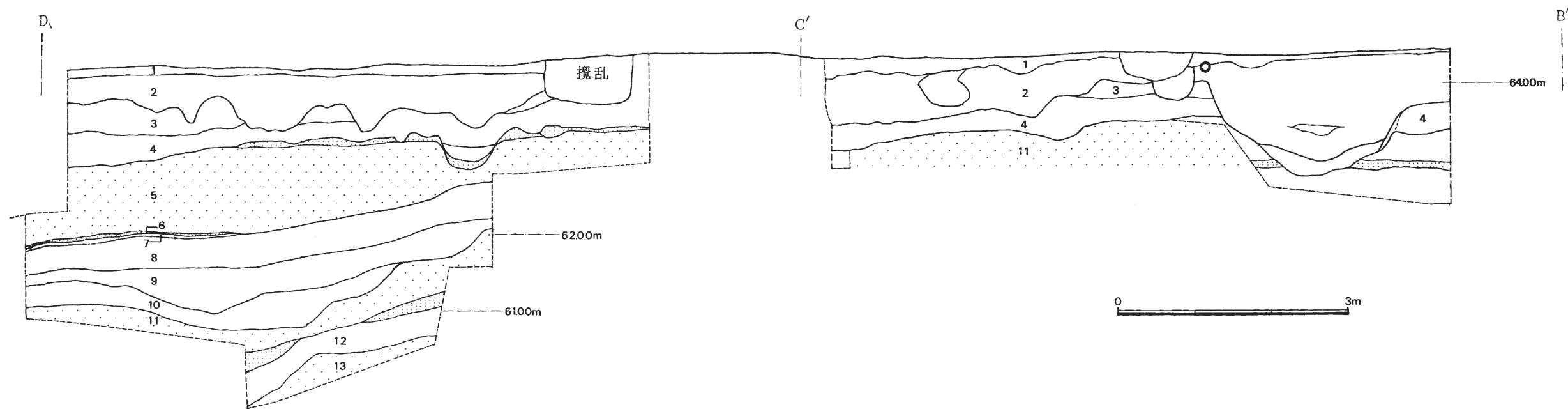


第Ⅰ図 農学部総合館北棟建設予定地
及発掘調査区位置図

旧農学部本館



第Ⅱ図 発掘区画



- | | |
|-----------------|------------------|
| 1 表土層 | 8 暗褐色砂質土層（先史第Ⅱ層） |
| 2 赤褐色砂質土層 | 9 黄褐色砂質土層（先史第Ⅲ層） |
| 3 暗褐色砂質土層（平安時代） | 10 黄色粘質土層（先史第Ⅳ層） |
| 4 黑色砂質土層（奈良時代） | 11 黄色砂層 |
| 5 黄色砂層 | 12 黑褐色粘質土層 |
| 6 淡黄細砂層 | 13 白砂層 |
| 7 黑褐色土層（先史第Ⅰ層） | |

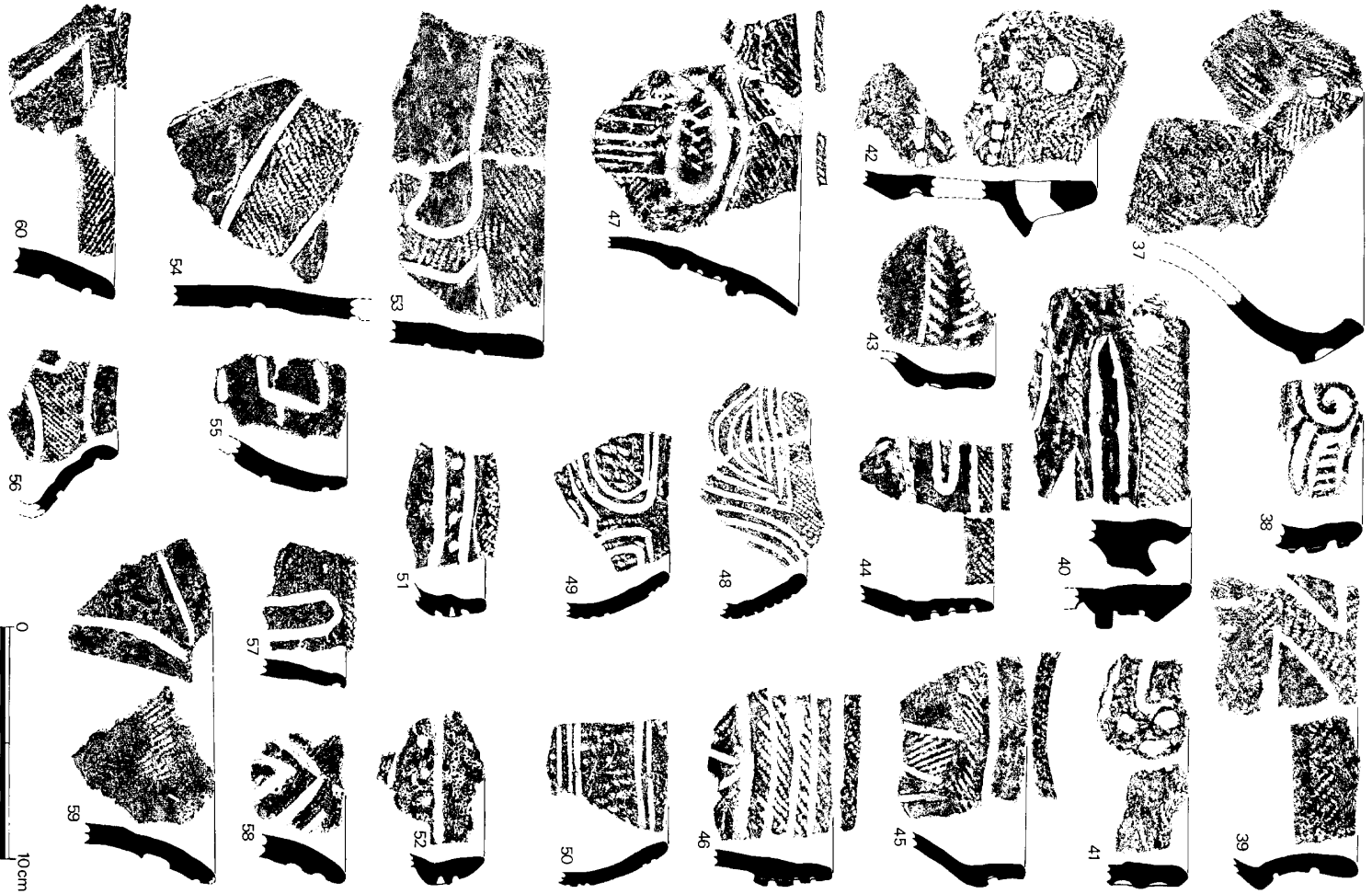
第Ⅱ図 B'・C'区北壁地層断面図



縄文式土器

I類-1 II類-2・3 III類-4 IV類-5~8

V類-9~29 (A種9~23, B種24~27, C種28・29) VI類-30~36 (A種)



繩文式土器

Ⅱ類-37~60 (A種37, B種38~47, C種48~50,

D種51・52, E種53~56, F種57~60)



繩文式土器

Ⅶ類 - 61 ~ 78 (G種 61, H種 62 ~ 64, 胴部 65 ~ 77, 底部 78)



1. 発掘調査区域



2. 発掘調査作業



1. 発掘調査終了



2. 層位



1. 層 位



2. 柱穴状ピット群



1. 土師器壺



2. 緑釉香炉



1. 綠釉陶器片



2. 磁器片



1. 軒丸瓦



2. 軒丸瓦



1. 軒平瓦



2. 貨錢



1. 弥生式土器・晩期縄文式土器



2. 縄文式土器 I・II・III・IV類



1. 縄文式土器 V類



2. 縄文式土器 VI類



1. 縄文式土器 VI類



2. 縄文式土器 VII類



1. 石 錘



2. 石 鋏



1. 石 匙



2. 石 皿



1. 石 棒



2. 磨 製 石 斧



1. 打製石斧



2. ナイフ型石器